

髑髏舞 一幕

吉井 勇

人物

俳諧亭句楽 狂人の落語家

大 尉

団 十 郎
└───┬───┘
狂 人

都 山

宝 田 典 凌 講 釈 師

お と し 句 楽 の 妹

その他一人の医師、二三人の看護婦、狂人など。

場所

東京の郊外（田端附近）

（郊外の小高い丘の上に立てられてゐる或る癡狂院の一室。二十四五畳も敷かれるかと思はれる大きな病室で、中央に一間幅位の通路を残して、両側はすべて畳を敷きその上は一
面薄縁張うすべりばりになつてゐる。通路は靴でも歩かれるやうな板の間。

上手も下手も灰色の土壁。ところどころに樂書がしてあつたり傷が付けてあつたりして、可なり汚れてゐる。病室の正面も同じやうな灰色の壁だが、中央の通路のところは二枚の硝子張りの開き扉。その両側は大きな硝子窓になつてゐる。

窓の向ふには二間幅位の廊下。廊下は向ふはやはり硝子戸になつてゐて、広い芝生の庭や遠くの森などが見えてゐる。廊下の直ぐ前の庭に花壇があつて、そこには何だか分からないが真つ赤に花が咲いてゐる。

秋の始めの或る晴れた日の午後。部屋の中の鬱陶しいのに引きかへて外は日光が温かに輝いてゐる。病室の両側の薄縁の張つてあるところに蒲団を敷いて、患者達が寝たり起きたりしてゐる。上手の側に三人、一番前に句楽、その次に都山、それから窓側にもう一人始終蒲団を被つて寝てばかりゐる狂人がゐる。句楽は五十四五位の坊主頭の頬の削けた目のぎよろりとした狂人の落語家。都山は四十七八位の瘦せた狂人の画工。下手の側に二人

丁度句楽と向ひ合ひのところが明いてゐて、その次に団十郎と呼ばれてゐる役者上りの狂人、その奥に大尉と呼ばれてゐる軍人上りの狂人がゐる。

句楽の傍には妹のおとしが附いて看護をしてゐる。おとしは二十七八位の商売人上りらしい女。句楽と向ひ合ひの丁度明いてゐるところに見舞に來た典凌が坐つてしきりに句楽の饒舌るのを聞いてゐる。典凌は句楽の弟分の講釈師で、髪を撫で上げた苦み走つた顔の
四十三四位の男)

典凌 (わざと感心したやうな顔付で) へえ、そいつは大したものを持ちましたね。さう云ふ機械が出来りやあみんな大助りでさあ。

句楽 (得意さうに) 何しろお前さんに一度その機械を見せてやりたいよ。ラムネや何かを作るやうなやつと違つて、何しろお前人間の魂を作る機械なんだから、ちよつと口で話したんぢやあ分らねえ位手が込んでらあね。ところでお前、これまでに、その人間の魂つてやつを見たことがあるかい。

典凌 いいえ、見たことはありませんね。

句楽 (うなづいて) さうだらう。こいつを見たやつは滅多にやあゐねえ筈だ。しかしこいつは見えねえ方が嘘なんだぜ。ほんとは誰にでも見えなくつちやあならねえんだが——それ、誰れしもこつちの魂に曇りがあらあ。さうなるともういくら見たいつて云つたつて見えねえやね。

よしまた見えたところでぼんやり形が分る位のもので、とても色なんぞ分りやあしねえ。一体この人間の魂つてやつはね。形なんざあ如何でもよくつて、色が大事なもんなんだ。それだからお前、形が分つたつて色が分らなけりや仕方がねえだらう。

都山 (急にこつちを向いて) 全く色が分らなくては仕方がありませんや。あなたも御承知だらうが京都の画工で彩霞つて男がおります。ありやああたしの兄弟子だが、あいつは如何も怪しからん男でね。あたしが一生懸命で考へ出したそりやあいい色の絵の具を盗みやがつたぢやありませんか。一体この色つてやつはね――

句楽 (都山に) おい、もう分つたよ。色の講釈ばかり何度聞かされたか知れやしねえ。ふつ、自分の魂の色も分らねえ癖に、色の講釈が聞いて呆れらあ。(都山の方を睨みつける)

都山 (びつくりして黙つて向ふを向く)

おとし (低い声で典凌に) あの人はね、都山つて云ふ画工なんですつて――

典凌 へええ――ずるぶんいろんな人がゐますね。

おとし (やつぱり低い声で) まだいろんな人がゐるわ。あなたの隣りにゐるのは役者よ。自分で団十郎だつて云つてゐるの。

典凌 (そつと隣りを見て) へえ、団十郎――

団十郎 (顔を上げてぐつと典凌を睨んでからにたと笑ふ)

おとし あのね、典凌さん、あなたもまだここにゐてくれるでせう。

典凌 ええ——

おとし それぢやあね、あたしあなたのゐる間にちよつと買物をして来ますから、あなた御面倒でも相手をしてやつてゐて下さいな。

典凌 ええ、ようがす。往つていらつしやい。

おとし それぢやあどうぞ——（おとしは句楽に知れないやうにそつと出てゆく）

句楽 （こつちを向いてまた話し始める）ええと——何だつけな——ああさうさう、人間の魂を作る機械のことだつて。それでね、お前、何しろ形を作るなら機械だと訳はねえんだが、形よりも色が大事だつて云ふんだらう。機械の仕組が込み入つてゐらあね。しかしね、お前はまた見たことがねえかも知れねえが、この人間の魂つてやつは、もとが極くチャチに出来上つてゐるもんで——さうさな、まあ、硝子の罫見てえなものと思やあ間違ひはねえだらう。その硝子の罫見てえなものなかに生命の水つてやつが入つてゐるんだが、人に依つてこの水にいろいろの色があるんだて。赤いやつ、青いやつ、紫のやつ、黄いろのやつ、それから中には黒いやつもある。ちよつと待ちな。お前のはどんな色だか、今ちよつとおれが見てやらう。（じつと典凌の胸のあたりを見つめる）

典凌 （笑ひながら）見えますかね。

句楽 見えるとも——よく見えるよ。（急に笑ひ出して）ははははは、変な形だな、お前の魂は——まるで何かにお押し潰されたやうにぺつちやんこになつてゐるところへ誰だか白墨で楽書

をしたと見えて、まづい字で何か書いてあるぜ。

典凌 (苦笑ひをして) 冗談ぢやあねえ。魂に楽書がしてあつてたまるものかな。

句楽 (むきになつて) そんなことを云ふならおれが読んで聞かしてやらう。いいか——かう書いてあるんだ。(じつと典凌の胸のところを見つめながら) それ、「道行比翼の初旅」とね。

典凌 (声を立てて笑ひながら) ははははは、そいつあ句楽さん、お前さんの好きな新内——「玉屋新兵衛」の名題ですぜ。

句楽 (強情に) いや、それがたとへ新内の名題でもだよ。ちやんとお前の魂にさう楽書がしてあるから仕方がねえぢやねえか。(調子を変へて) しかし、安心しねえ。白墨で書いてあるんだから、ちよつと何かで拭きやあ綺麗に除れつちまふよ。何もさう心配することあねえやな。きつとそいつはあのお前も知つてゐる新内語りの蝶丸のいたづらだぜ。あいつめ、中々味をやりやがらあ。(一人で面白さうにくつくつ笑ふ)

団十郎 (句楽の笑ふのに釣り込まれたやうに同じやうにくつくつと笑ふ)

句楽 (急に笑ふのを止めて団十郎に) やい何がをかしいんでえ。

団十郎 (まだ笑ひつづけて) 何がをかしいつて——お前さんが笑つてゐることがやつぱりあつしにもをかしいのさ。

句楽 へつ、おれがをかしくつて笑つてゐることがお前に分つてたまるものか。(典凌に向つて) なあおい、典凌。こいつ位太え奴はねえんだぜ。自分で八代目団十郎だつて云つてゐやがるん

だが、如何もおれにやあほんととは思へねえんだ。第一団十郎なら目玉がもつとかう大きくなくちやならねえのに、まああの男の目を見ねえ。落語家や講釈師だつてあんなしよぼしよぼ眼のやつはゐやあしねえぜ。

団十郎 お前さん方はまだ見たことがねえんだな。あつしがぐつと睨むと舞台一面目玉になつてしまふんだが——それをあつしの目玉が小せえなんて——はははははは——（笑ひつづける）

典凌 それにお前さん、八代目つて云やあ大阪で自殺をしたあの団十郎でせう。

句楽 さうよ。あいつよ。

典凌 それぢやあ死んだもんがここにゐるつてはずはないぢやありませんか。

句楽 いや、そりやあお前さんの云ふことが間違つてゐるよ。

典凌 如何してですな。

句楽 だつてお前、人間つてものはうまくやつてりあ何時まで経つたつて死なねえものなんだぜ。

典凌 へえだつて現在お前さんやあつしの友達でもずゐぶんこれまでに死んでゐるぢやありませんか。

句楽 それがさ。世間のやつ等は何にも知らねえから死んだと思つてゐるんだが、おれの目から見りやああいつ等の中にはまだ生きてゐる奴がずゐぶんゐるね。一体死ぬつてことはさつき話した硝子の罫見てえな魂が壊れて、中に入つてゐる生命の水が流れ出しちまふことを云ふんだが、世の中にはまだこの魂つてやつをこつそり何処からか盗んで来て、売つてゐるやつがある

からひでえぢやねえか。それだから一度壊れてもまた新しいのを買って来りやあそれでいいのよ。だかの、こいつがまたべらぼうに暴利ぼりやがるんで——実はおれが魂を作る機械を發明したつて云ふのも、それが癩かさに触ったからのことなんだ。

典凌 (笑つて) 成程、それで天下の人を救はうつて訳ですな。

句楽 さうよ。これからどんな機械で拵たごらへるからさう高え金を出して買はずに済むと云ふもんだ。何しろさう云ふ訳だからこれまではお前、暴利ぼりるだけぼつたもんじゃないね。二三日前も蝮へびの吉兵衛さんがやつて来て——ああ、お前も蝮へびの吉兵衛さんを疾うに死んだものと思つてゐるだらうが、あの人もまだ生きてゐるんだぜ。今でも小唄はうめえもんだ。ほんとにあの人の唄うたふ声を聞いてゐるとたまらなくなるね。ところで——おれは何で吉兵衛さんの話をし始めたんだらう。(しばらく考へて) ああ、さうさう。二三日前吉兵衛さんがやつて来ての話に、御維新前の魂の相場を聞いたんだが、あの時分は安くつて一兩で買へたつて云ふぢやねえか。それが近頃ぢやあ——それ二度もつづけて、戦争があつたらう。それで相場が上がつて、この間の市なんぞぢや五万円つてやつがあつたさうだ。

典凌 へええ、魂の市なんてえものがあるんですかねえ。

句楽 あるともさ。今度おれと一所に往つて見ねえ。そりやあ賑かて面白れえから——
典凌 それで一体其市は何処どこに立つんですね。

句楽 ああ、その魂の市の立つところか。そりやあお前分つてるぢやねえか——吉原よ。

典凌　へえ、吉原ですつて——こいつはちつとも知らなかつたね。

団十郎　（突然声色のやうな調子で）知らざあ云つて聞かせやせう、浜の真砂と五右衛門が、歌に残した盗人の種は尽きねえ七里ヶ浜——音羽屋あと来やがらあ。ねえ句楽さん。あつしもこれで旅廻りさへしてゐなかつたら五代目位にやあなつてゐたんだ。何しろお前さん、信州の小諸でね、加賀見山の岩藤で宙乗をやつてゐると、そのまま如何しても降りられねえぢやありませんか。さうして宙乗をしたままここまで来ちまつたんだから、あつしは如何考へても不思議でならねえんですよ。

句楽　（嘲けるやうに笑つて）ははははは、一生さうやつて考へてゐるがいいや。そのうちにやあ分る時が来るだらう。（典凌に）兎に角ここにやあ変つたやつがあるよ。しかしここに来てゐるやつはみんな可哀さうなやつ等ばかりなんだぜ。みんな貧乏で新しい魂の買へねえやつ等よ。

典凌　それぢやあここには生きてゐるものは一人もゐねえ訳ですな。

句楽　さうよ、生きてゐるのはお前とおれと二人つきりさ。

典凌　それぢやあお前さんの発明した機械で早く魂を作つてやるこつてすね。

句楽　それだからおれは急いでゐるんだが——何しろ先づその機械を作るのに金が入るんで、それでちよつと弱つてゐるのよ。如何でえ、お前の知つてゐるもんで、金を出して呉れるやつはゐねえだらうか。

典凌 一体その機械を作るのにやあいくら懸かるんです。

句楽 そんなところがおれにも勘定が出来ねえんだよ。如何でえ、かうしたら——お前とおれとで二人会をやつて、その上りで機械を作るつてことにしたら——一度で足りなかつたら幾度でもやりやあいぢやあねえか。

典凌 成程、こいつは名案だ。ようがす。やりませう。

句楽 それぢやあ帰つたら早速何処かの席亭へ話してくんねえ。

典凌 ようがす。こいつはあつしが受け合ひましたよ。しかしね。句楽さん。お前さんさう自由にここから出られますかい。

句楽 牢屋ぢやあるめえし、何時だつて出られらあな。

典凌 しかし。ここは病院ですぜ。

句楽 病院——冗談云つちやいけねえ。ちよつと見はさう見えるかも知れねえけれども、ここはお前墓場だよ。

典凌 (びつくりしたやうな顔付で) 墓場ですつて——

句楽 (うなづいて) ああ、墓場さ——成程、お前に分らねえのは無理はねえ。生きてゐるおれがかうやつてゐるんだから、如何も墓場たあ思へねえだろう。しかし、おれがここにかうしてやつて来てゐるのは、今も話した魂を作る機械を發明しようと思つて来てゐるんで、何も別に不思議でも何でもねえだらうぢやねえか。

典凌 (気味悪さうに四辺を見廻はして) 成程、さう云やあ全く墓場ですね。

句楽 墓場だとも——これが何で病院なものか。病院はおれがこれから建てようと思つてゐるんだ。これもやつぱり魂の病院よ。

典凌 へえ、魂が病院に入りますかね。

句楽 (笑つて) ははははは、変に思ふのは無理もねえよ。しかし魂だつてやつぱり病気になることがあるんだぜ。さうすりやあやつぱり病院がなくつちやあならねえぢやねえか。そこでおれがその病院を建てようと思つてゐるんだが——何しろ先きに立つものは金と来てゐやがるんで如何も思ふやうに仕事が運ばねえのよ。

典凌 (だんだん変になつて来る) はははは、面白れえね、魂の病院か——

句楽 (得意になつて) 如何でえ。面白れえだらう。

典凌 全く面白うがすよ。魂の病院たあ考へたね。(じつと考へ込む)

句楽 おい、如何したんだい。

典凌 (顔を上げて) あのね、句楽さん。あつしの魂はそんなに変な形になつてゐるんですかねえ。

句楽 ああ、変だよ。

典凌 ぢやあ如何でせう。その病院が出来たらあつしの魂を早速そこに入れてやつてくれませんか。

句楽 ああ。いいとも——しかしそれよりもお前には素晴らしい魂をひとつおれが拵へてやらう。

都山 (傍から口を出す) ねえ、句楽さん。あたしにもひとついでに拵へてやって下さいな。

句楽 うん、お前にはまあ中位のやつだ。

典凌 だがしかしそれは何時のこつてすね。

句楽 さあ、それがおれにも分らねえのよ。何しろそれを拵へるには今も話した機械がなくちやあならねえんだが、これを作る金がねえ始末だらう。なあにね、金のことはお前とおれの二人会の上りや何かで如何にかなるだらうと思ふんだが、それよりもおれはその材料を見付けるのに困つてゐるのよ。

典凌 何です。一体その機械の材料は——

句楽 さあ、こいつはちよつと明かされないね。しかしお前がこれからずつと、おれと一所に仕事をしようつて気なら、お前にだけはそうつと聞かしてやつてもいいよ。

典凌 そりやあやりますとも——(独り言のやうに) 面白れえやね——魂を作る機械——魂の病

院——成程ね、そりやあ魂だつて病気になることがありませう、また壊れることもあるだらうさ。そこへ目を付けたのは全くえらいよ。流石は句楽さんだよ。ようがす、あつしはそれからお前さんの弟子にならう。さうしてお前さんと一所に仕事をしよう。いいでせう。句楽さん。お前さんはあつしを弟子にして呉れるでせう。

句楽 (うなづいて) ああ、いいとも——お前が弟子になつて呉れりやおれの方で大助かりだ。

典凌 有難てえ。ぢやあお前さんあつしを弟子にして呉れるんですね。

句楽 (笑つて) さうくどく云ひなさんな。弟子にするつて云つてゐるぢやねえか。(急に声を潜めて) しかしな、氣を付けなくちやあいけねえぜ。それ向ふの隅に髭を生やした爺さんがゐるだらう。ありやあ如何もおれは岡つ引ぢやあねえかと思ふんだ。

典凌 へえ、墓場にも岡つ引がゐるんですかね。

句楽 ゐるともさ。(大尉の方を見ながら) あいつ自分ぢやあ陸軍大尉だつて云つて威張つてゐやがるんだけれど、如何もおれにはさうは思はれねえんだ。まあ、あの目付を見ねえ。何だかかういやに凄い何か探し出さうつて云つたやうな目付をしてゐるぢやねえか。

典凌 (こはごは大尉の方を見て) しかし句楽さん、岡つ引が髭を生やしてゐるのはをかしうがすね。

句楽 昔なら節季候せきざろにでも身を窶やつすところなんだらうが今の世の中だからああやつて、軍人見てえな髭を生やしてゐるのさ。如何もあの髭が怪しいて。(首を振りながら考へてゐる)

典凌 (同じやうに首を振りながら) 如何もあの髭が怪しいて。

(やや長い間。大尉は急に立ち上がつて部屋の中をあつちに往つたりこつちに来たり散歩を始める。それがだんだん兵隊が歩調を取るやうな足附になつて来る。そのうち不図句楽と典凌の目が出会ふ。二人は突然大きな声で笑ひ出す)

句楽
典凌

(同時に) なあんだ。あつははははは——

(これに伴れて都山も団十郎も、しまひには大尉までが立ち留つて狂ほしい笑ひ声を上げる。)

看護婦が二三人その声を聞き付けて廊下に現はれ、びつくりしたやうな顔付で病室の中を覗き込む。

と同時にみんな笑ひの絶頂からころがり墜ちたやうに急にしいんと黙り込んでしまふ。可なり長い間の重苦しい沈黙。

看護婦達はしばらく中の様子を見てゐたが直ぐにまた廊下づたひに往つてしまふ)

句楽 (じつと典凌の胸のあたりを見てゐたが) おや、こいつあ不思議だ。お前の魂の形がまた変つたぜ。

典凌 (びつくりして) 何ですつて——

句楽 (笑つて) ははははは、こいつあ面白れえ。今度はお前、無暗に膨れつちまつたよ。さつきまであんなにぺつしやんこだったものが、急に膨れ出したんだから不思議ぢやあねえか。

典凌 (気味が悪さうに胸の上を撫でて見て) へえ、そんなに膨れつちまひましたかね。

句楽 何だな。お前の魂はまるで護謨風船見てえなものだな。しかし今度は中々いい形だ。おやそれに中に入つてゐる水の色も、さつきまで真つ青だつたやつがすっかり真つ赤になつちまつた。

典凌 へえ、赤えのはいいんですかい。

句楽 いいともさ。それならおれが新しく拵へてやらなくつても大丈夫だ。

都山 しかし句楽さん。あたしのは忘れずに拵へて下さいね。中位ので結構だから――

句楽 (それには返事もしず) ああ、さうさう。――なあ、典凌。それで――その魂を作る機械の材料だがね。

典凌 ええ、さうさう――その話その話――あつしにだけなら聞かして呉れてもいいでせう。

句楽 (声を潜めて) 何しろこいつを知つてゐるのは、おれとそれからあの平賀源内位のもんなんだから、誰にも話しちやいけねえぜ。いいかい。

典凌 (うなづく)

句楽 まあ、こつちへ来な。誰かに聞かれるといけねえから――

(典凌は立つて真ん中の通路を横ぎつて句楽の傍へ往つて坐る)

句楽 (やつぱり声を潜めて) その材料つて云ふのは酒から取れる金なんだよ。酒から金が取れ

るつてこともお前にやあ初耳だらうが、これは何も不思議なことぢやあねえんだ。酒の色を見
たつて分るだらう。酒はみんな黄金色をしてゐるぢやあねえか。あれがもう酒から金が取れる
つて証拠よ。一番始めにそいつを見付けたのはあの平賀源内——風来山人さ。この人もまだ生
きてゐて時々おれのところにやつて来るが、人間の魂を作る機械の発明も実を云やあおれ一人
でやつたんぢやあなくつて、この人と一所にやつた仕事なんだ。

典凌 (すつかり魅せられた人のやうに黙つて句樂の話聞いてゐる)

句樂 (やつぱり低いが力強い声で話しつづける) それでその酒から金を取る方法だな——これ
がどんな酒にでも金があると極まつてゐりやあ世話あねえんだが、中々金の取れる酒つてえも
のはさう沢山あるものぢやあねえや。さあ、それだから先づ、これは金の取れる酒か金の取れ
ねえ酒かと云ふことを飲み分けなくちやあならねえだらう。これがまあひと仕事だよ。おれは
これまでずぶん酒を飲んだけれど、ありやあお前、唯飲んでゐた訳ぢやあねえんだ。つまり
その——今云つたやうな酒の飲み分けつてやつをやつてゐた訳なんだよ。さうだな。これから
おれの弟子になるつて云ふんだから、先づ手始めにこの酒を飲み分けることから教へてやらう。
典凌 (喜んで) へつ有難てえね。それで——如何してその金の取れる酒か取れねえ酒かつてこ
とが分るんです。

句樂 さあ、そこが秘伝よ。誰かに聞かれるといけねえ。ちよつと耳を借しねえ。

(句楽は典陵の耳の傍へ口を寄せて何かささやく。典凌はしきりに點頭きながら聞いてゐる。)

可なり長い間。

小さな風呂敷包を持つておとしが入つて来たが、二人のこの有様を見てぎくりと驚いた顔附。暫く入口の扉のところ立つたままじつと二人の様子を見てゐる)

句楽　なあ、分つたらう。しかしこれは大事な秘伝だからな。誰にも知らしちやあいけねえぜ。

これがみんなに知れて見ねえ。誰も彼も金の取れる酒を見付け出して、おれがこれから拵れえようと思ふ魂を作る機械なんか出来ねえやうな事になつちまはあ。

典凌　全くでさあ。これをお前さんやあつし等の仲間になんぞ知らさうもんなら大事おほごとですぜ。え
えおい、酒から金が取れるつて云ふぢやあねえか——なんて訳で血眼になつて飲みやあがるでせうよ。(異様に笑ふ)

句楽　それでなくつたつて飲みたくつてうづうづしてゐるやつ等なんだ。こんなことが知れようもんならいいことにして飲みやあがるだらう。

都山　(溜息をつくやうに) ああ、酒か——酒も久しく飲まないなあ。

典凌　(びつくりして) おつと、危ねえ。(句楽に都山の方を目で示して) 今の話を聞かれやあしねえでせうね。

句楽 大丈夫だよ。(急に大尉の方を睨んで)しかしあん畜生は油断がならねえぞ。あいつさつきからおれ達の方にばかり目を着けてゐやがる。

典凌 あいつですかい。(大尉の方を見る途端におとしを見出す)ああ、おとしさん――

(おとし二人の傍に近寄る)

おとし (探るやうに笑ひながら)如何したの、典凌さん。馬鹿に兄さんと仲が好くなつちまつたのね。

典凌 まあ喜んで下さい。おとしさん。あつしは今日から句楽さんの弟子にして貰つたんですよ。おとし だつてをかしいわね。講釈師が落語家の弟子になるなんて――

典凌 いいえ、あつしはね、その落語の弟子ぢやあねえんです。あなたは無論御承知だらうが、今度句楽さんの発明した魂を作る機械ね――あれの方の弟子なんですよ。

おとし まあ、典凌さん。本気でそんなことを云つてゐるの。

典凌 ええ、本気ですとも――ねえ、句楽さん、お前さんはほんとにあつしを弟子にして呉れたんでせう。

句楽 当り前よ。弟子にしねえもんに誰があんな秘伝を教へるものかな。

典凌 (おとしに)そうれ、御覧なさい。兄さんがちやんとああ云つてるぢやありませんか。

おとし (いたましいと云つたやうな表情で典凌の顔を見つめてゐる)

典凌 面白うがすぜ。おとしさん。魂を作る機械が出来て御覧なさい。そりやあどんなに大勢の人が幸福しあわせになるか分りやあしねえ。如何して如何して——こいつはたいした発明でさあ。あなたの兄さんは全くえらい人ですよ。あつしはこれまでにこんなえらい人に会つたことがありませんね。それにまだ魂を作る機械ばかりぢやあねえ。魂だつて病気になるから、その魂が入るやうな病院を建ててつて云ふんですぜ。如何です、おとしさん。その病院が出来たらあなたひとつ看護婦になりませんか。

おとし (あいまいに) ええ——

典凌 (急に何か思ひ出した様子でおとしに) ところで——あつしはもうこれから一生句楽さんの傍は離れねえつもりなんだが——一体この墓場にかうやつてゐるには、警察に届けるとか何とかしなくつてもいいもんなんですかい。

句楽 いいんだよ。関はねえから安心してここにゐな。今にな、白い着物を着た幽霊の役人見てえなやつがやつて来るから、そいつに云やあそれでいいんだ。

おとし しかし、典凌さん。あんた心配ならあたしちよつと往つてさう云つて来て上げませう。
典凌 へえ、どうぞ——

(おとしは立ち上がつて病室から出てゆく。短い間)

典凌 ねえ、句楽さん。あつしはほんとにここにゐても関はねえでせうかね。

句楽 ああ関はねえとも――

典凌 だつて墓場なら死んだやつでなくつちやあ来られねえところでせう。

句楽 冗談云つちやいけねえ。現在おれがかうやつてここにゐるぢやあねえか。

典凌 成程――

(そこへ一人の医師と二三人の看護婦が足早に入つて来る。おとしもこの人達の後からつづく)

句楽 (その人達を見て典凌に) おお丁度いいや。幽霊の役人がやつて来たぜ。あの人達にここにゐてもいいかつて聞いて見ねえ。きつといいつて云ふに違えねえから――(医師等典凌の傍に近寄る)

医師 (おとしに) この人ですな。

おとし (うなづく) ええ――

典凌 (医師に) あのお願ひがあるんですが――

医師 え、何です。

典凌 如何なもんでせう。生きてゐるやつがこんなことを云ふと變にお思召ほしめすかも知れませんが、どうぞあつしをここにゐさせて下さいませんか。

医師 (うなづいて) ここにゐたいつて云ふんですね。

典凌 ええ、実はあつしは今日からこの句楽さんの弟子になりましたんで――

医師 ああ、さうですか。ええ、いらしつても関ひませんよ。(軽く) ちよつとお手を拝借。(脈を取る) それであなたはここにゐて何をなさらうつて云ふんです。

典凌 ええ、ひとつその人間の魂を作る機械を拵へようつて云ふんで――

医師 (診察をしながら) ははあ、そいつは大発明ですね。

典凌 (ちよつと周章てて) いや。それはあつしが発明したんぢやないんで――この句楽さんが発明したんで――

句楽 (得意になつて) 如何です。たいした発明でせう。今にお前さんにもひとつ作つて上げるから待つておいでなせえ。

医師 (微笑しながら) ええ、どうぞ――

(医師は診察が終つてからおとしに何か耳打をして看護婦達を連れて出て往つてしまふ。句楽はじつと何か考へ込んでゐる。沈黙。外では日光がやはり温かに輝いてゐる)

おとし (典凌に) 典凌さん。まあこつちへ来てお坐んなさい。(その座蒲団を指す)

典凌 (おとなしく元の席に戻つて) ああ、何しろ有難てえ。ねえ、おとしさん。あつしはもう句楽さんのことなら、もうこれから何でも云ふことを肯きますよ。何しろえれえ人だよ。落語はなしを聞いてゐる時分はそんなだとは思はなかつたんだが、ここへちよくちよく見舞に来るやうになつてから始めてえれえ人だつたことが分るやうになつたんだ。(団十郎の方を向いて) お前さん方もあの人を唯の落語家はなしかだと思つちやあいけませんぜ。何しろ魂を作る機械を發明したんだからえれえものさ。

団十郎 成程ね。そいつあやつぱり宙乗の機械のやうなもんですかい。

典凌 冗談云つちやいけねえ。(句楽に) ねえ、句楽さん。そんなチャチなもんぢやあねえでせう。

句楽 (じつと考へ込んだまま返事をしない)

おとし (典凌に) 何か考へてゐるのよ。黙つていらつしやい。

典凌 ありやあまたきつと何か發明しようと思つて考へてゐるんですぜ。

団十郎 (独り言) 如何も分らねえよ。如何してあつしはあすからここまで宙乗でやつて来たんだらう。さうだ。あの時は翫車さんの尾上であつしの岩藤——お初は一体誰だつたつけ。何しろあの蝶々が曲者だて——あれを扇子で払つてゐるうちに何時の間にかここへ来てしまつたんだから——如何もあの蝶々に何か仕掛がしてあつたのに違えねえ。

句楽 (むつくり顔を上げて) 仕掛も何もあるものけえ。

団十郎 (びつくりして独り言を止める)

句楽 仕掛で魂を作らうって云ふんぢやねえんだ。おれの拵へようって機械には仕掛も何もありません。唯かう機械を据ゑ付けて置いて、こつちの孔からかうやつてふうつと息を吹き込むと、向ふの孔からころころ魂が転げ出さうって趣向なんだ。

典凌 (感心して) 成程、うめえ趣向だ。

句楽 如何でえ、うめえ趣向だらう。平賀源内のやつもこいつには感心してゐたぜ。

典凌 そりやあ誰でも感心しまさあ。

句楽 ところで、典凌。おれは今つくづく考へたんだが、如何も魂を作る機械を拵へるより先きに、魂の病院を建てなくちやいけねえと思ふよ。

典凌 へえ、それは一体如何云ふ訳ですな。

句楽 如何云ふ訳つてお前、近頃のやうに無暗に魂を壊すやつがゐちやあ危くつて往来も歩かれやしねえからな。

典凌 へえ、魂の破片かけらでも往来に落つこつてゐるんですかい。

句楽 落つこつてゐるどころか——何処へ往つてもべた一面ぢやあねえか。みんな世間のやつ等はそれが見えねえもんだから、平氣でのこのこ歩いてゐやがるんだけれど、おれのやうにそいつが見えるやうになると、もう危くつて危くつて足の踏場もありやしねえ。

典凌　へえ、一体その魂の破片を踏ん付けると如何なるんです。

句楽　気違えになるのよ。気が違つちまふのは厭ぢやあねえか。

典凌　全くですね。気違えになる位なら死んぢまつた方が余つ程ようがさあ。

句楽　それでおれは今考へたんだが、ああ魂を壊すやつが多いところを見ると、きつと何か魂の間に病気が流行つてゐるに違えねえんだ。それだからよ。まあ、先きに魂の病院を建てた方がよからうと思ふんだが——さて、第一に考へなくつちやならねえのは、この病院を建てる場所だ。

典凌　そいつは、如何です、ひとつ吉原と極めちやあ——今でも魂の市が立つて云ふからまんざら因縁のねえ話でもなし——

句楽　成程、吉原がいいかも知れねえ。

典凌　一体その魂の病院で云ふのはどんな家を建てるんですね。

句楽　そりやあおれは疾うからもうちやんと考へてあるんだ。何もたいした大きな家でなくつてもいいんだから、少し贅沢だけれども柱も屋根も壁もみんな硝子張にしようと思ふんだ。一体この魂つてやつは日に当てねえと直きに黴の生えるもんでね——たん黴が生えたとするともう始末にいけねえものなんだ。それだから家中硝子張りにして置けば日が当るから、黴が生える心配がねえ。それにまた外から中がすつかり見通せるから、盗まれたり何かしねえ用心にもならあ。

典凌 面白れえ。面白れえ。それで病院は出来たと——しかし、句楽さん。お前さんは、魂を作る機械を拵へねえ訳ぢやあねえんでせう。

句楽 当り前よ。何でこれが止せるものかな。こいつはおれの一生の仕事なんだ。

典凌 (力を籠めて) こいつはあつしにも一生の仕事だ。

句楽 (嬉しさうに) 面白れえぢやねえか。魂を作るんだぜ。——人間の魂を——赤いやつ、青いやつ、紫のやつ、黄いろのやつ、それからまた真つ黒なやつ——如何でもおれ達の自由に作ることが出来るんだ。赤い色の魂が欲しいやつには赤い色の魂をやる。青い色の魂が欲しいやつには青い色の魂をやる。紫でも黄いろでも、また真つ黒な魂の欲しいやつがありやあ真つ黒な魂を作つてやるのよ。みんな喜ぶぜ。何しろ世界中の人が喜ぶんだからお祭をやつたり何かして大騒ぎよ。おれとお前もどんなにみんなから有難がられるか知れやしねえ。

典凌 そのお祭騒ぎのところへ二人でひよつこり出懸けて往つたらみんな何て云やがるでせう。

句楽 びつくりするには極つてゐるが、しかしそんなところへ出懸けてゆくのにたつた二人ぢやあ面白くねえ。如何でえ、かう云ふ趣向は——どんな出来るとだけ魂を沢山作つて、それを死んぢやつたやつ等に一つづつ分けてやるんだ。これまでに死んだやつつて云へば何千何万何億あるかちよつと数へきれねえ位の人数だらう。こいつ等に魂を一つづつやりやあみんな地面の下から息を吹き返してのこのこ起き上がつてやつて来らあ。如何でえ。この骸骨に行列を造らして、そのお祭騒ぎの中へ乗り込んで往つたらきつとみんなびつくりするぜ。

典凌 成程、そいつは面白うがすね。

句楽 (ちよつと目をつぶつて) 何しろかうやつて目を閉つて考へてゐるといふんなことがはつきり目に見えて来るぜ。こつちから息を吹き込むと向ふからころころ魂が転げ出すところだの、骸骨がむくむく起き上がつてそれが行列を作つて歩き出すところだの——おや、骸骨が踊り出しやがつたぜ。(典凌に) 面白れえからお前もちよつと目をつぶつて見ねえ。

典凌 (目をつぶる) ああ、見えますよ。成程一面の骸骨だ。

句楽 (つぶつたまま) ほうら、見えるだらう。何千何万つて骸骨がかたまつて踊つてゐやがるんだ。

典凌 (やつぱり目をつぶつたまま) あつ、後あとから後からやつて来るぢやありませんか。

句楽 ほら、あんなに円くなつて——面白さうに踊つてゐやがらあ。(思ひ迫つたやうな声で) ああおれも早くあの仲間に入つて踊りてえなあ。

典凌 (同じやうに思ひ迫つたやうな声で) あつしも一所に踊りてえなあ。

(二人は何時までもじつと目をつぶつて髑髏舞の幻を見つめてゐる。おとしは二人を見ながらそつと涙を拭く。墓のやうに重苦しい狂人達の沈黙。遙かに遠い日光のかがやき)

幕

底本 吉井勇全集 第五卷

著者 木俣修 編集並に解説

出版者 番町書房

出版年月日 昭和
38